碩心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可

神奈川　碩心会　発行

60年12月号（161号）
発行者
根岸岳萃
編集
中村愛岳

60年12月現在会員数	
逗子地区	173名
葉山地区	296名
大船地区	55名
（合計）	（524名）

思い出

松和支部　武藤薫風

私はかつて同僚グループの会合の折、友人が武田節の歌謡「甲斐の山々日に映えて…」と歌われ、歌の中頃に詩吟が入り、

疾レ如　風　徐　如レ林
侵　掠　如レ火　不レ動　如レ山

その朗々たる吟詠を聞き、詩文は勿論、音調、リズム歌の前後と調和し、実にすばらしく心に感じ、自分も出来たらさぞ楽しいことであろうと思ったことがありました。

偶々近所の知人、菊地さんが詩吟教室に行っておられるということを知り、老令の自分が果して出来るであろうか、ついてゆけるだろうかと不安もあり、ためらっておりましたが、とにかくやってみようと決め、五十三年四月、菊地さんと同道して、温習会場を訪れ、三井先生にお目にかゝり入会させていたゞきました。

会場には二十名前後の方々が席についておられ、一同の方々にご挨拶し末席につきましたが、皆さんは既に一、二年以上の先輩の方々であることを聞き、更に不安の気持でおりますと、やがて三井先生から、今日は「吉野懐古」をやりますと言われ、山禽叫び断えて…と皆さんと一緒に練習に入り、先生について数回繰返し練習いたしました。そして次に先輩の方から座席の順に独吟が始まり、最後に私が指名され、年甲斐もなく、顔赤らめてあわてゝ立ち上り、勇気を出して初めての一吟一声でした。終って三井先生より懇切丁寧に要点を指導して頂き、ほっとした思い出で、忘れられないひとゝきでした。

その後は会を重ねるごとに、皆さんともお知り合いになり、毎週のお稽古で勉強の積重ねにつれ、格調ある吟道の深さに魅せられ、楽しく過すことが出来るようになりました。ほんとうに今日あるは偏えに三井先生並びに下條先生の御指導と励ましによるものと、有難く感謝申しあげ、今後共よろしくお願い申しあげます。

◎61年度碩心会初吟会のお知らせ

とき・61年1月19日(日)10時～16時
ところ・京急ビーチセンター

◎県本部高段者審査会

七段・61年2月9日(日)9時より受付
八段・61年2月16日(日)　〃
皆伝以上・61年2月23日(日)　〃
場所・いずれも平塚農業会館

逗子市文化祭

詩吟詩舞発表会

曇り空の十一月十七日、逗子市図書館ホールで詩吟詩舞発表大会が行われました。少年少女の合吟が四題あり、大きなハリのある吟声にたのもしく思いました。

この日、岳風会神奈川県本部七・八段の講習会と重なるので低調？かと心配しましたが、あまり影響を受ける事もなく、スムーズに進行され、書華道吟、詩舞、吟詠と各流派の方達が相集い、なごやかなうちに、日頃の練習の成果を充分に発揮し、三時半終了。来年の大会をめざし、心新たに研鑽を約して閉会いたしました。　村田静岳

天候に恵まれ

葉山地区吟道温習会盛会

十一月二十三日(日)葉山小学校体育館に於て行われた。暖房設備のない会場故、天候が一番気がかりでしたが、神の恵みか、暖かいよい天気でホッと胸をなでおろしました。あいにく地区長の沼田洸岳先生が風邪の高熱で欠席というハプニングがありましたが、副地区以下皆さんの協力で無事盛会に終ることができました。協賛地区の皆様御協力ありがとうございました。

岳風先生最後の書簡

（原文のまま）

松井さん（現松井岳洋先生）遠路度々御親切御訪問感謝の外ありません。

五月・六月分テキスト第廿七・八集必死の思ひで凸版原稿を山本臥山君に書いて送ってもらひました。日も迫り居ること我儘ながら一日も早く前例に習って五分角内に吟符をつけられるよう御配字下さい。

茲二、三日で死線を突破出来ます。これと同じ用紙になるべく太い字でお頼みします。六月廿二日夜十時　岳風

（指導者講習会の折、松井先生に見せていたゞき感動させられ、松井先生のお許しを得て掲載させていたゞきました。できれば岳風先生の自筆をそのまゝコピーしたかったのですが間に合わず残念です。やせ細った手で仰向けに寝たまゝで書かれたという事を松井先生も後日聞かされたという事です。ごらんになった方もおありと思いますが素晴らしい達筆で、死ぬ間際まで吟道ひとすじに生きられた先生のお姿を思い、この書簡に深く感動いたしました。先生はこのあと七月一日永眠されました。）

平家流亡

去る十月十日、岳風会第88回全国大会が神戸文化会館に於て盛大に行われ、神奈川県本部からは吟行会を兼ね約二百名が参加、私もその中のひとり…。今年は平家滅亡八百年でもあるので、ゆかりの神戸を思い出しながら〝平家流亡〟の歴史をさぐってみることにしました。

治承四年（一一八〇）源頼朝伊豆に、木曽義仲は信濃に挙兵、富士川の合戦で平家を敗る。その翌年、戦前の国定教科書に、日本の代表的成り上り者、権勢を誇る悪役として記されていた平清盛が64才で没。そして寿永二年（一一八三）、木曽義仲の軍は都へ迫った。そこで平氏一門は安徳天皇、三種の神器を擁してあわたゞしく都を西へと落ちていった。六百日に余る平家流亡の始まりであった。

平氏の都落ちから半年…年が明けて寿永三年（一一八四）平氏を都から迫った義仲は義経に討たれ、天下の形勢は関東の頼朝と西国で勢いをとりかえした平氏とに二分されていた。

平氏は一ノ谷に陣をかまえた。父祖清盛がかって都と定めた福原…現在の神戸付近

である。北に山、海上には軍船を置き、迫る源氏と決戦の構えをみせていた。二月七日突如として六甲山の背後を大きく迂回して一ノ谷に刹到する義経の手兵…鵯越えの坂落としである。この奇襲に平氏は算を乱し海へ逃れた。平氏は清盛の弟薩摩守忠度をはじめ、多くの武将を失い、清盛の息子重衡は捕えられ、中でもわずか十七才、逃れる身を熊谷直実に呼びとめられ岸へ返した敦盛の最後は、戦場に笛を携えたゆかしさとともに、人びとの涙を誘った。源平ゆかりの須摩寺には遺愛の〝青葉の笛〟が残されている。

青葉の笛

一の谷の軍営遂に支えず
平家の末路転悲しむに堪えたり
戦雲収る処残月有り
塞下笛は哀し吹く者は誰ぞ

一ノ谷で敗れた平氏は、四国の屋島に拠った。義経わずか五艘、百五十騎の兵を率いて屋島に向ったのは一ノ谷の戦いのおよそ一年後。瀬戸内海を完全に制覇してきた平家は、一ノ谷に敗れても、なお屋島には多くの船と強力な水軍を擁していた。しかしこゝでも義経の奇襲攻略が功を奏し、平家は、あわてふためき、海土の船へ逃げ移り、重要な屋島の基地を失った。

屋島の浦の合戦

濤声は高し屋島の浦風
弓絃鳴りを生じて落す扇の的
碧血の海上雌雄を決し
敵船を走すは源義経

一ノ谷、屋島と源氏に敗れた平氏は本州最西端長門へ本拠を移した。近くの島々の周辺は源氏の水軍で埋っていた。平氏は正面から戦いをいどむべく、安徳天皇、建礼門院はじめ一門の女どもの乗った唐船が戦場へ向った。関門海峡は潮流の激しい海峡で、この潮の中、両者の舟が戦いの時を待ち構えていた。一ノ谷、屋島と奇襲で成功した義経は、こゝでもまた奇襲を用い、潮の流れを利用して平氏の舟を追いまくった。平氏随一の武将、能登守教経は源氏の兵をわきに抱え身を海に躍らせた。又清盛の妻二位尼もこれまでと幼い帝を抱いて身を投じ、又建礼門院も、わが子の最後をみて海中へ。そして多くの女房、武将が次々と海に沈んでいった。

かくして「平家にあらざれば人にあらず」とまでいわれた平家一門は短い中に一族郎党の大半が滅び去った。平氏滅亡のあとも源氏の落ち武者狩りはきびしかった。それとともに平氏ゆかりの人々は山深く散っていった。今も平家部落を名のる土地は数多い。

稗搗之歌（ひえつき）

屋島之浜壇の浦の辺り
平家の末路亦憐むに堪えたり
残党隠遁す上椎葉
山岳深き処炊煙を見る
〝庭の山椒の木なる鈴かけて
鈴の鳴るときや出ておじゃれ〟
哀話綿々栄華の夢
稗搗の俚謡今に至るまで伝う

愛岳

頭の体操

詩文の一節を掲げました。（吟題）（作者名）をあてゝみましょう。

一、年々歳々花相似たり
　歳々年々人同じからず
二、捨るが是か捨てざるが非か
　人間の恩愛斯の心迷う
三、年は流氷の如く去って返らず
　人は草木に似て春栄を争う
四、人生古より誰か死無からん
　丹心を留守して汗青を照さん
五、時に及んで当に勉励すべし
　歳月は人を待たず

練吟メモ

○今回は山にちなんだ話題を取り上げてみたい。比較しやすいように、始めに地元の山から申し上げると、まず、葉山地区でおなじみの仙元山は、結構高く見えるが標高は一〇一メートルである。逗子地区では鷹取山、これも案外で一三九メートルに過ぎないのは意外である。大船・戸塚地区は、電車の窓からでは丘陵地帯であるので、地図で確認する手間を省略した。

○「常盤孤を抱くの図」の「鉄梶」山は、神戸市の裏山といわれる六甲山の西南端にある。標高は二三六メートル。急傾斜で須磨の浦に臨んでおり、その真下に一の谷がある。源平の戦で、義経はこの山を背後から馬で上り、そして一の谷の平家の陣に奇襲をかけた。いわゆる「ひよどり越えの逆おとし」で、これはあまりにも有名。

○爾霊山は、標高二〇三メートルあるので二〇三高地と称した。日露戦争当時、ロシヤの軍港である旅順港の背後に位置し、軍港守備を目的とした重要な要塞であった。第三軍指令官乃木大将は、将兵の犠牲を覚悟で猛攻を加えた。大砲だけでは陥落させられないので、いわゆる肉弾また肉弾の攻撃を繰り返した。このため二〇三高地は、砲弾と戦死者（鉄血）が折り重なって山の形が変ってしまった。この時の死傷五万五千。戦い終って将軍乃木希典は二〇三高地を仰ぎ見て思わず爾霊山（なんじ将兵らのみたまのやま）と命名した。まさに、将軍ならではの命名であろう。ついでながら、当時の砲弾の破壊力は「山を覆え」すほど強力ではなかったし、また物量も乏しかった。占領後山上のベトコン（コンクリート）作りの要塞を見て、将兵はその重装備にびっくりしたとか。（山を覆えす）と読むのと（山を覆う）と読むのとでは、その内容と意義は大違いであることに留意願いたい。

○高段者の審査課題「獄中作」（旧教本三66）の二句目に「天拝の峰」がある。福岡県の北部にあり、天拝山と称し、標高は二五八メートル。平野地帯に住む我々から見るとかなり高い山である。

此地身に検繋なしといえども
何すれぞ寸歩も門を出でて行かん
（菅原道真）

左遷されてから門を出ないといわれた菅原道真公も、この山に登ってはるか東天を拝したという。山上に小祠があり、秋は紅葉で知られている。以上を念頭において勉強すれば、審査は楽々合格するとのこと。

谷川岳天神平にて　清田嬬風

紅葉狩　ひといろそえたり初雪の山
初雪の　山にて賞でる紅葉狩

（変　更）

164 加藤聖風・電話番号七五―八八八六に

（入　会）

719 田中日佐子　葉山町一色一九一六
（上　原）（電）〇四六八―七五―一〇五六
720 徳本徳子　逗子市逗子六―三―九
（堀内・D）（電）〇四六八―七三―五六九二
721 長谷川トミ　横須賀市長坂二―一―九
（堀内・D）（電）〇四六八―五六―九一〇一

（退　会）

279 河内秋山（滝ノ坂）
550 梶谷　実（上　原）
679 大谷一夫（滝ノ坂）

「風邪かな」と思ったら卵酒

向寒の季節を迎え、風邪をひきやすいシーズンとなりました。もしかったかな？と思ったら卵酒を。信じられぬほど身体が温まるとともにぐっすり安眠。栄養価も高く、体力回復に一番。作り方はいたって簡単。日本酒を煮立て火を止め、砂糖を入れ、卵を少しづつ入れながらかきまわしてショウガ汁を入れてでき上がり。風邪に負けないで、よいお年をお迎え下さいますよう。